京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **31** (2012), 133–180

ジンポー語の格標示

倉部慶太

1　はじめに

ジンポー語 (Jingpho/Jinghpaw) はビルマ北部域に位置するカチン州およびシャン州北部を中心に、東は中国西南部雲南省徳宏タイ族景頗族自治州、西は東北インドのアッサム州およびアルナーチャル・プラデーシュ州にかけて国境を越えて分布するシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派に属する言語である。

本稿の目的はジンポー語の格の総合的な記述・考察を行うことである。まず、2 節でジンポー語の概要を述べた後、3 節で格を定義し、ジンポー語の格標示形式の目録および概要を提示する。4 節では S/A/P を標示する形式を記述し、特に対格標識の生起条件に関して考察を行う。5 節では位置・起点・着点・経路などの場所的な意味役割を標示する格を対象に記述を行う。6 節では以上の節で取り扱わなかった属格・共格を記述し、また、格の役割を果たす名詞に関して考察する。

本稿で行う格記述の枠組みは澤田編 (2010) を参考にしている。澤田編 (2010) はチベット・ビルマ語派に属する 14 言語の格をそれぞれ記述・考察した論文を収めた論文集である。この論文集は形式の観点よりも機能の観点に重点を置いて節が構成されており、言語間での対照がしやすくなっている。本稿もこの記述の枠組みを採用し、ジンポー語とほかのチベット・ビルマ語派諸語の対照研究にも有用であるよう心掛けた。

ジンポー語の格を包括的に扱った文献はまだないが、格への言及のある先行研究は少なくない。Hanson (1896) および Hertz (1911) はビルマのジンポー語の概略を示した文献である。これらの文献にも格に関する記述が見られるが、言語学的立場から記述されているわけではなく、厳密性に欠ける部分もある。また、分量も多くはなく、格に関する記述は Hanson (1896) では 4 頁、Hertz (1911) では 1 頁に留まっている。

言語学的立場から記述されたジンポー語の参照文法に、中国科学院少数民族語言研究所主編 (1959)、劉編 (1984)、戴・徐 (1992) がある。これらの文献はいずれも中国雲南省徳宏タイ族景頗族自治州盈江県銅壁関公社を中心に分布するジンポー語方言 (恩昆方言) を対象としている。このうち、戴・徐 (1992) は質・量ともに最も包括的な参照文法として知られている。この文献も第 11 節において格を取り扱うが、ここでこの文

献と本稿との相違点を挙げておく。第一に取り扱う方言の相違がある。戴・徐 (1992) が取り扱う方言は中国雲南省に分布する方言であるが、本稿で取り扱う方言はビルマに分布する方言であり、これら方言間には格標識に関しても相違が観察される。例えば、中国のジンポー語では属格 ná は従属部名詞が場所・時間の場合に用いられるとされるが、本稿で取り扱うビルマのジンポー語では属格 ná にこのような制約は見られない (6.2)。第二の相違点は分析の違いである。例えば、本稿では格の機能を果たす名詞を格名詞という範疇を設定し取り扱うが (6.5)、戴・徐 (1992) はこのようなとらえ方をしていない。戴・徐 (1992) は本稿で格名詞として扱う mǝjò「ために」(原因) を連詞 (接続詞) として扱い、本稿で格名詞として扱うその他の形式に関しては記述が見られない。また、戴・徐 (1992) は対格標識が用いられる場合に関して、目的語が動作行為を起こす名詞であるときに付加される、動物が目的語で主語と曖昧であるときに付加される、目的語の構造が複雑なとき往々にして付加される、という 3 つの説明を与えているが、これらは体系的説明とは言い難い。本稿では Comrie (1981) の有生性階層を援用し、より網羅的・体系的に対格標識の生起条件を明らかにしている (4.2.3)。加えて、本稿では戴・徐 (1992) に示されていない対格標識の生起条件も多く取り出している。第三の相違点としては詳細さの違いがある。戴・徐 (1992) は格の記述にあまりスペースを割いてはおらず、格を扱った部分は 11 頁に留まり、その多くは一文程度の説明といくつかの例文を列挙するに留まっている。また、文法的な文しか取り扱っておらず、類似する格同士の関係に対する説明も示されないなど、必ずしも詳細であるとはいえない。使用頻度が高く重要であるはずの位格 kóʔ、位格 thàʔ、向格 dèʔ に関しては取り立てて扱っておらず、ほとんど何の説明も与えていない。

最後に本稿において扱う例文の出典に関して言及しておく。特に言及のない限り、本稿において提示する例文は母語話者の自然談話などから得られた実例である。ただし、個人の特定を避ける目的で人名を人称代名詞に置き換えてある。例文の収集は筆者が編纂したジンポー語の口語コーパスを使用した。このコーパスは 2009 年から 2012 年の間にジンポー語母語話者から筆者に送られたメール、および、筆者と母語話者との間でやり取りされたチャットから筆者の発話を取り除いた部分より構成されている。母語話者の年齢層は 10 代および 20 代である。本稿ではこのコーパスをジンポー語準口語コーパスと呼ぶ。このコーパスの規模を次表に示す。

表 1　コーパスの規模

	メール	チャット	総語数
トークン頻度	84,931 語	238,304 語	323,235 語
タイプ頻度	2,637 語	6,272 語	7,133 語

2　ジンポー語の概要

2.1　ジンポー人とその言語

ジンポー人は、ビルマ北部、中国西南部、東北インドと国境を越えて広範囲に居住する。ジンポー人は同じ民族意識を持つロンウォー Lhaovo (マル Maru)、ラチッ Lacid (ラシ Lashi)、ツァイワー Zaiwa (アツィ Atsi) などの民族とともに「カチン (Kachin)」と呼ばれる文化的集団を形成する。このうち、ロンウォー、ラチッ、ツァイワーなどの民族はロロ・ビルマ語支ビルマ語群に属する言語を話し、言語的にはジンポー語よりもむしろビルマ語と近い関係にあるのだが、カチン民族を構成する人々は共通の文化を持ち、ビルマ人とは異なるひとつの文化集団を形成している。カチン民族への言及は14、15 世紀の中国の文献にまでさかのぼるが (Lehman 1993: 115)、管見の限り、西洋の文献で最も初期に言及した文献は Buchanan (1799: 228) であり、そこで 'Ka-kiayn' という名称で紹介されている民族がカチン民族であると考えられる。Buchanan (1799: 228) は 'A wild people on the frontiers of China' という説明を与えている。

カチン民族の中ではジンポー人の人口が最も多く、ジンポー語はカチン民族の共通語 (lingua franca) としても機能している。そのため通常、「カチン語」というとジンポー語を指し、「カチン語」と「ジンポー語」は同一の言語を指す同義語としてしばしば用いられてきた。Bigandet (1858)、Cushing (1880)、Hanson (1896, 1906)、Grierson (1903)、Hertz (1911)、Shafer (1955, 1966)、西田 (1960, 1992)、Benedict (1972)、Egerod (1974)、Nishida (1977) などの文献はカチン語 (Kachin/Kakhyen/Kakying) の名称で言及している[1]。しかし、「カチン」がビルマ語群の言語を話す、ジンポー人以外の民族をも含む文化集団を指し、また、この名称は自称 (autonym) ではなくビルマ人による他称 (exonym, ビルマ語で /kəchiɴ/) でもあることから、Burling (1971, 1983)、Matisoff (1974, 2003, 2012)、Bradley (1997)、van Driem (2001)、Thurgood (2003) のように、現在はジンポー語 (Jingpho/Jinghpaw) の名称で言及することが一般的になりつつある。

Bradley (1996) はジンポー語の話者人口を 650,000 人程度と推測し、ビルマに 630,000 人、中国に 15,000 人、インドに 2,000 人の話者が居住すると述べている。上述のとおり、ジンポー語はカチン民族の共通語としても機能しており、ロンウォー、ラチッ、ツァイワーなどのジンポー語を第二言語として用いる話者も含めるならば、ジ

[1] Lehman (1993) はこの Kachin/Kakhyen/Kakying などの名称がジンポー語 *gá-khyeŋ* (earth-red) に由来するとし、次のような説明を加えている (p.114): 'Kachin' comes from the Jinghpaw word 'GaKhyen', meaning 'Red Earth', a region in the valley of the two branches of the upper Irrawaddy with the greatest concentration of powerful traditional chiefs.

ンポー語を用いる話者の人口は 100 万人弱程度になると推測される。

ジンポー語にはいくつかの方言が認められるが、その実態は未解明の部分も多く、総合的な研究は今後の研究に俟つところが多い。Kurabe (2012e) は先行研究・言語事実・母語話者からの報告に基づき、現在までに知られている 16 種のジンポー語方言の概要・分布図・系統図を提示している。本稿で扱う方言は、ビルマのカチン州の州都であるミッチーナー市 (Myitkyina) およびカチン州第二の都市であるバモー市 (Bhamo) を中心に分布する方言である (ミッチーナー市、バモー市、およびカチン州のその他の主要都市に関しては以下の図 1 を参照されたい)。この方言はビルマで話されるジンポー語の中で最も標準的な方言であり、ビルマ地域におけるジンポー語出版物はこの方言を用いて表記されるのが基本である[2]。本稿ではこの方言をミッチーナー＝バモー方言または標準ジンポー語と呼ぶ。以下では断りのない限り、本稿でジンポー語と言う場合はこの方言を指す。

2.2 系統

ジンポー語がシナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派に属することに関しては疑いの余地がないが、この語派内部におけるジンポー語の位置づけに関してはこれまで様々な説が提案されてきた。Shafer (1955, 1966) はジンポー語 (群) (Katśinish Section) をビルマ語支 (Burmic Division) に位置づけた。同様に、Egerod (1974) もジンポー語 (群) (Kachinish) をビルマ語支 (Burmic Languages) に分類した。Matisoff (1974) は声調対応に基づき、ジンポー語をロロ・ビルマ語支と関連付けようと試みた文献である。

一方、Burling (1971, 1983) はジンポー語がロロ・ビルマ語支とは全く異なる語支に属すると指摘し、ジンポー語とロロ・ビルマ語支間に見られる多くの語彙の共有はビルマ語群の言語からのジンポー語への語彙借用によるという考えを示した。そして、ジンポー語がボロ・ガロ (ボド・ガロ) 諸語やコニャック語、ルイ語群の言語と「太陽」を意味する語に *sal という形式に由来する革新形を共有することから、これらの言語を 'Sal' languages (Bodo-Konyak-Jingpho) と命名した (Burling 1983) [3]。Bradley (1997)、van Driem (2001)、Thurgood (2003) も基本的に Burling の考えに従っている。

[2] ジンポー語の正書法は 1890 年にカチン州に赴任した米国バプティスト派の宣教師 Olaf Hanson によって 1890 年代前半に考案された (Crider 1963: 371, 藪 2001)。この正書法はローマ字による文字体系を持ち、文は基本的に単語ごとに分かち書きされる。なお、本稿における表記は正書法ではなく、筆者の分析による音韻表記を用いる。

[3] ジンポー語の対応形式は jan「太陽」である。Burling (1983) はこれらの言語に見られる共通の革新の例として、他にも *war「火」、*s-raŋ「空」、*wa「父」、*nu「母」などの例を掲げている (ジンポー語の対応形式はそれぞれ、wàn「火」、məraŋ「雨」、wâ「父」、nû「母」である)。

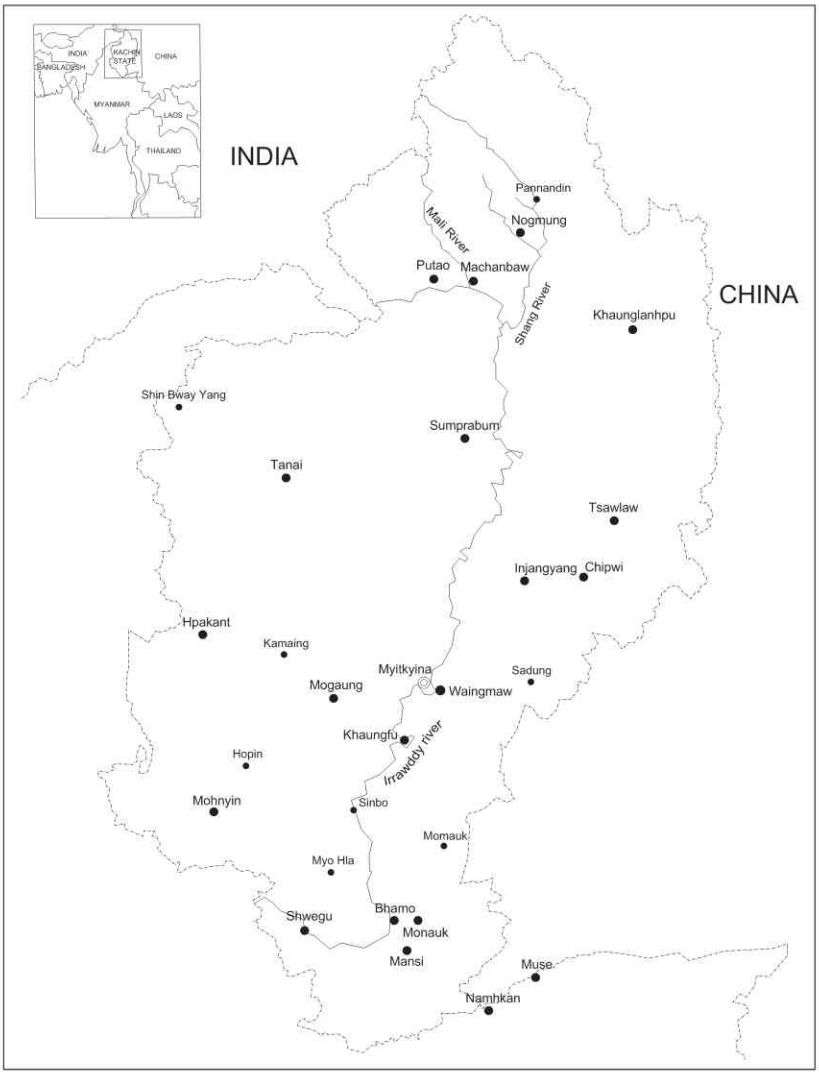

図 1　カチン州

Matisoff (2003) は Jingpho-Nungish-Luish という語支を立て、ヌン語群やルイ語群の言語とジンポー語の関連を示している。Matisoff (2012) は藤原 (2008)、Sangdong (2012) などの最新の言語資料を用いた言語事実に基づき、チベット・ビルマ語派内において系統的にジンポー語と最も近い関係にあるのはルイ語群であり、ジンポー語とヌン語群の間に観察される語彙の類似性は借用によるものであると結論付けている。

このようなジンポー語系統論に見られる不確定性の一因は、この言語がチベット・ビルマ語派の様々な下位語支や下位語群に属する言語と語彙的・形態的な特徴を共有

する点にある。ジンポー語の分布するビルマ北部域はチベット・ビルマ語派諸語分布の中心地帯 (heartland) に相当し、上記のジンポー語の特徴はこの言語の地理的分布と無関係ではないとされる。

西田 (1960) や Benedict (1972)、Nishida (1977) はこのようなジンポー語の特徴を考慮し、上述した文献とは異なる観点からジンポー語を位置付けた。西田 (1960)、Nishida (1977) はジンポー語が他のチベット・ビルマ語派諸語の下位語群の特徴を合わせ持ち、これら下位言語群を結びつける性格を持つことを指摘し、ジンポー語をチベット・ビルマ語派諸語を結びつける繋聯言語 (link language) のひとつと位置付けた。Benedict (1972) もジンポー語がチベット・ビルマ語派の下位語群に属する言語と語彙的・形態的特徴を共有することを指摘し、チベット・ビルマ語派諸語の地理的中心および言語多様性の中心にジンポー語を位置付けた図 2 のような概略図を提示している[4]。

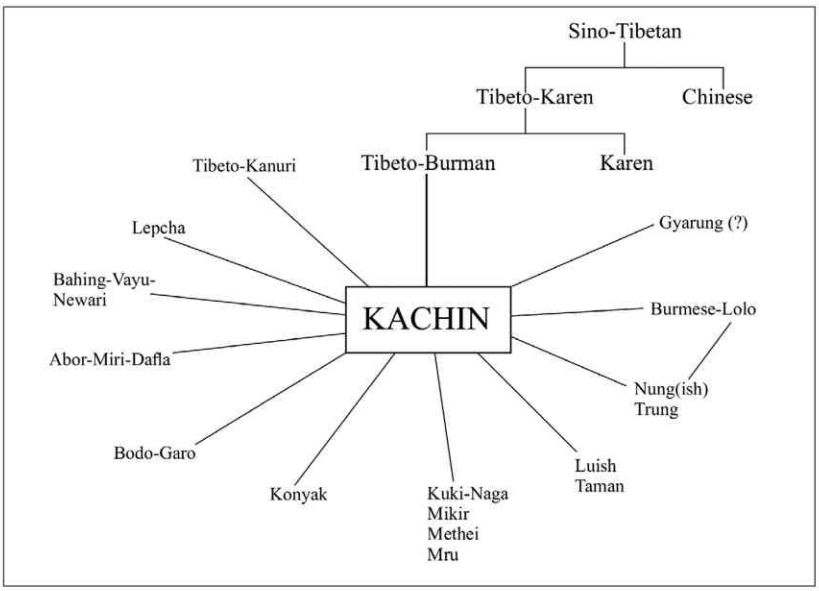

図 2　Benedict (1972) による概略図

2.3　類型的特徴

ジンポー語は音節声調を持つ声調言語であり、高平調 /má/ [55]、中平調 /ma/ [33]、低下降調 /mà/ [31]、高下降調 /mâ/ [51] の 4 種類の声調が弁別される。このうち高下

[4] この図ではジンポー語はカチン語 (Kachin) という名称で言及されているが、2.1 で述べたとおり、これらは同一の言語を指す。

降調を持つ語は極めて少数であるが、この事実は高下降調が二次的に他の声調より発生したことを示唆する。基本的な音節構造は (ʔ)C(C)V(C)/T であり、介子音には /r, y/ が、末子音には /p, t, k, ʔ, m, n, ŋ, w, y/ が現れうる。子音音素には /p, t, c, k, ʔ, ph, th, kh, b, d, j, g, ts, ɕ, s, z, m, n, ŋ, l, r, w, y/ が、母音音素には /i, e, a, o, u, ə/ が認められる。

形態論は分析的・膠着的であり、動詞複合 (verbal complex) は様々な接辞や助動詞の付加によって拡張される。従属部標示 (dependent marking) と主要部標示 (head marking) の両方を併せ持つ (double marking) 言語である。従属部標示の例として、文法関係は主に名詞句に後接される格標示形式によって標示され、所有構造においては従属部名詞が属格により標示される。格標示パタンは主格・対格型 (S/A vs. P) である。主要部標示の例としては、節の主要部たる述語動詞に主語および目的語の人称・数と一致する接辞が付加されることがある。ただし、この接辞はオプショナルであり、特に口語ではこの種の接辞を用いると不自然ですらある。

チベット・ビルマ語派に属する大部分の言語と同様、ジンポー語の基本構成素順序は述語が必ず節末に現れる動詞末尾型 (verb-final) の語順を示す。テンスは文法化されておらず、アスペクト・ムード卓立型の言語である (その他の類型的・地域的特徴などに関しては、倉部 2011, 2012a, Kurabe 2012b, 2012c, 2012d などを参照)。

最大の名詞句の構造は以下のように図式化することができる。指示詞は主要部名詞に先行することも後続することもある。

(1) **REL-GEN-DEM-HEAD NOUN-DEM-PL-[CLF-NUM]-NOMINAL PARTICLE**

本稿では、ジンポー語の語類として、名詞・動詞・副詞・助詞の 4 類を立てる。本稿における語類は以下の 3 つの基準を用いて認定する。

(a) 単独で文を形成し得るか否か
(b) 否定辞 ń- を付加し得るか否か
(c) 属格 ʔàʔ/ná によって修飾され得るか否か

これらの基準の組み合わせからジンポー語の語類は次表のように定義される。

表 2　語類の認定基準

	(a)	(b)	(c)
名詞	yes	no	yes
動詞	no	yes	no
副詞	yes	no	no
助詞	no	no	no

3　格標示形式の目録

Blake (1994: 1) は「格」を以下のように定義する。

> Case is a system of marking dependent nouns for the type of relationship they bear to their heads.

本稿ではこの定義を満たす形式を格標示形式と呼ぶ。ジンポー語における格標示形式の種類には大きく分けて、格助詞、格名詞、音韻的交替、従属節から成る表現、無標形式の 5 つが認められる。以下の各節ではこれら個別の記述を行うが、本節では格標示形式の目録を提示し、概観を与えておく。

3.1　格助詞

格助詞は従属部名詞に後接され、節の主要部たる述語または名詞句の主要部たる主要部名詞に対するその名詞の関係を標示する助詞である。ジンポー語における格助詞の目録を次表に掲げる[5]。

表 3　格助詞の目録

形式	名称	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示	参照箇所
phéʔ	対格 (ACC)	P	経路	4.2.2, 4.2.3, 5.8
kóʔ	位格 (LOC)		位置・所有者・着点	5.1
thàʔ	位格 (LOC)		位置・比較の基準・着点	5.2
ʔè	位格 (LOC)		位置	5.4
dèʔ	向格 (ALL)		着点・位置	5.5
ǹná	奪格 (ABL)		起点	5.6
khu	通格 (PER)		経路・様態	5.9
ʔàʔ	属格 (GEN)		所有者	6.2
ná	属格 (GEN)		所有者	6.2
thèʔ	共格 (COM)		相手・随伴者・道具など	6.4

[5] 格助詞の多くは音節末に声門閉鎖音を持つが、その理由は不明である。同源形式を持つ他の方言や言語との比較研究が俟たれる。

3.2　格名詞

本稿では、mətu「ために」(目的・利益)、məjò「ために」(原因・理由)、məláy「代わりに」、zòn「ように」の 4 つの形式を格名詞と呼ぶ。格名詞は節の主要部たる述語に対する従属部名詞の関係を標示する機能を持ち、格標示形式の一種であるといえるが、格助詞とは異なり、格名詞は助詞の性質のみならず名詞の性質をも併せ持つ。具体的には、格名詞は単独で文を成さない点で助詞と共通するが、属格標示の従属部名詞によって修飾される点では名詞と共通する。この後者の性質を重視し、本稿では格名詞を格助詞とは異なる範疇であると見なす。格名詞に関しては 6.5 で記述する。

3.3　音韻的交替

人称代名詞単数形は名詞内の音素を交替させることによって、主要部名詞に対する所有関係を標示することができる。この交替は人称代名詞単数形にのみ観察され、ジンポー語の格標示形式の中では極めて周辺的な形式である。音韻的交替による格標示に関しては 6.3 で述べる。

3.4　従属節から成る表現

着点を標示する形式 dùkhrà は、形式的には動詞 dù「着く」と接続助詞 khrà「まで」とから構成される。ただし、この表現における動詞 dù「着く」には意味の抽象化が見られ、また、否定辞を付加することができず、向格名詞句を取ることができないなど、形態統語的にもすでに動詞としての性質を失っている。この形式に関しては 5.7 で記述する。

3.5　絶対格

本稿では、上記のいずれの格標示形式も伴わずに現れる名詞句を絶対格で現れる名詞句と呼ぶ。絶対格で現れる名詞句には以下のようなものがある。

- 自動詞の主語 (4.1.1)/他動詞の主語 (4.1.1)
- 他動詞の目的語 (4.2.1)
- 移動の着点 (5.10)
- 時間名詞 (5.10)
- コピュラ補語 (6.1)
- 数量詞句 (6.1)

- 呼びかけの対象 (6.1)

4 S/A/P を標示する形式

本稿では、Comrie (1981) および澤田編 (2010) に従い、S/A/P を以下のように定義する。

- S: 自動詞の単一項、すなわち (自動詞) の主語
- A: 他動詞の動作主項および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、すなわち (他動詞) の主語
- P: 他動詞の被動者項および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、すなわち目的語

4.1 S/A を標示する形式

4.1.1 絶対格

S は状態自動詞の主語であれ、動作自動詞の主語であれ、必ず絶対格で現れる。

(2) ŋay dàyní jòŋ=dèʔ sa-ʔay.
1SG today school=ALL go-TAM
「私は今日学校へ行った」

(3) ŋay ń-dàŋ tsun=khrà gəbu-ʔay.
1SG NEG-be.able say=till be.glad-TAM
「私は言葉にできないほどうれしい」

以下の例に示すとおり、A は典型的に絶対格で現れる。

(4) ŋay làyka thí=ŋút-say.
1SG letter read=finish-TAM
「私は手紙を読み終わった」

(5) ń-lù yúp=ná ŋay məkhón mədàt-ʔay.
NEG-be.able sleep=SEQ 1SG song listen-TAM
「眠れなかったので私は歌を聴いた」

(6) náʔ=ná gənù naŋ=phéʔ gəyèt=dá=na=lu.
2SG.GEN=GEN mother 2SG=ACC beat=RESL=FUT=SFP
「あなたはお母さんに殴られてしまうよ」

以下の (7) に示すとおり、作例では A が奪格で標示される例も文法的であると判断される。この種の奪格の用法は筆者の準口語コーパスには出現せず、極めて周辺的な用法であると考えられる[6]。

(7) ŋay=kóʔ=ná ɕi=phéʔ gəyèt-ʔay.
1SG=LOC=ABL 3SG=ACC beat-TAM
「私は彼を殴った」(作例)

4.1.2 戴・徐 (1992) の「主語助詞」について

戴・徐 (1992: 255–6) は gò という形式に関してこの助詞は主語の後に置かれ、前の成分が主語であることを示すと述べている。戴・徐 (1992) は gò を「主語助詞」と命名し、他の格助詞である対格 phéʔ (4.2.2) や、位格 thàʔ (5.2)、共格 thèʔ (6.4) と同列に扱う。この形式の例として 戴・徐 (1992: 255–6) は以下のような例を挙げている[7]。

(8) ŋay=gò màgam rê.
1SG=gò PSN COP
「私はマガムです」(戴・徐 1992: 255)

(9) nday lam=phéʔ=gò gəday=mùŋ ce-say.
this matter=ACC=gò who=also know-TAM
「このことはもう誰でも知っている」(戴・徐 1992: 256)

この分析には問題があり、それは単純にこの形式が実際には主語以外の名詞句の後にも生起するという事実にある。例えば、この形式は上記の例 (9) では目的語の後に、また、以下の例では付加詞の後に生起している。

[6] この例は「私から (順番に) 彼を殴った」という意味も表しうる。この種の例が極めてまれであること、および、ビルマ語では奪格によって主語を標示することがあることを考慮すると、ジンポー語におけるこの奪格の用法はビルマ語からの文法借用である可能性が高い。都市部に居住するジンポー語話者は全てビルマ語とのバイリンガルである。

[7] これらの例における声調や一部の分節音などの表記は戴・徐 (1992) の表記を本稿での表記に変更してある。

(10) gənaw=thèʔ=gò ń-khrúm=ɕì-ʔay.
younger.brother=COM=gò NEG-meet=still-TAM
「弟とはまだ会っていない」

(11) jòŋ=kóʔ=gò məray krúʔ+ɕi=rám ŋà-ʔay.
school=LOC=TOP CLF six+ten=about be-TAM
「学校には 60 人ほどいる」

さらに、この形式は名詞句のみならず、名詞句以外の様々な要素の後にも生起しうる。例えば、以下の (12) では副詞の直後に、(13) では動詞語幹の直後に、(14) では副詞節の直後に gò が生起している。

(12) nday sumpan nàw=gò ń-tsòm-ʔay.
this cloth too=gò NEG-be.beautiful-TAM
「この布はあまりきれいではない」

(13) ŋay mìt=gò nóʔ mìt=to-ʔay.
1SG think=gò still think=CONT-TAM
「私は考えていることはまだ考えている」

(14) gəthèt=yàŋ=gò jawjaw ròt=dìʔ=ná ʔəmú ləwan ŋút-ʔay.
be.hot=if=gò early get.up=DO=SEQ work be.quick finish-TAM
「暑ければ早く起きて仕事が早く終わる」

上述のとおり、戴・徐 (1992) は gò を対格 phéʔ や位格 thàʔ、共格 thèʔ と同列に扱うが、対格や位格、共格は上例のような分布を示さないため、 gò を他の格助詞と同列に扱うことには問題がある。gò は実際には主題化や対比の際に用いられ、戴も後にこの形式を主題助詞と呼び換えている (戴 2001) [8]。gò と同じ分布を示す形式には他に mùŋ「～も」、ɕà「～だけ」、ɕèʔ「～こそ」などがある。本稿ではこれらの形式をまとめて副助詞と呼び、格助詞とは別の範疇として分類しておく[9]。

[8] 張 (2004) は戴・徐 (1992) 附録の民話資料を利用し、この形式と日本語「は」を対照している。

[9] なお、戴・徐 (1992) は gò を除く mùŋ「～も」、ɕà「～だけ」、ɕèʔ「～こそ」などの形式を副詞として分類している。しかしながら、これらの形式は nàw「あまり」や jawjaw「早く」などの副詞とは異なる分布を示すため、副詞と同列に扱うことはできない。例えば、(12) や (14) のように副詞は基本的に動詞の直前に現れるが、(13) のように動詞の直後に現れることはない。

4.2　P を標示する形式

P は絶対格で現れる場合と対格 phéʔ を伴って現れる場合とがある。

4.2.1　絶対格

P が絶対格で現れる例には以下のような例がある。

(15) ŋay day məkhón ràʔ-ʔay.
1SG that song like-TAM
「私はその歌が好きだ」

(16) ŋay=má yáʔ sùmla mù-say.
1SG=also now picture see-TAM
「私もいま写真を見た」

(17) ɕi dùŋ=dìʔ=ná làyka thí=to-ʔay.
3SG sit=DO=SEQ letter read=CONT-TAM
「彼は座って手紙を読んでいた」

また、三項他動詞の対象も基本的に絶対格で現れる。

(18) naŋ ŋay=phéʔ myèn+múŋ=ná pha thèt=məyu-ʔay=ráy.
2SG 1SG=ACC Burma+country=GEN what order=want-TAM=Q
「あなたは私にビルマの何を (お土産に) 頼みたいですか」

4.2.2　対格

P が対格で標示される例としては以下の例がある。

(19) ŋay dàyní=túp naŋ=phéʔ là=to-ʔay rê.
1SG today=whole 2SG=ACC wait=CONT-NMLZ COP
「私は今日ずっとあなたを待っていたのだ」

(20) seŋ+mədùʔ=gò ŋay=phéʔ tsóʔ+ràʔ-ʔay rê.
shop+keeper=TOP 1SG=ACC love+like-NMLZ COP
「店主は私を愛してくれるのだ」

(21) ŋay ɕánthe=phéʔ yu=ná gràỳ məni=məyu-ʔay.
1SG 3PL=ACC see=SEQ very laugh=want-TAM
「私は彼らを見てとても笑いたくなった」

また、三項他動詞節の受益者も対格で現れる。

(22) ŋay gənaw=phéʔ kúmpháʔ jòʔ=dàt=na=yô.
1SG younger.brother=ACC gift give=release=FUT=SFP
「私はあなたにプレゼントをあげますね」

4.2.3 対格の機能

上述のとおり、P の標示には対格と絶対格の交替が認められる。本小節では対格と絶対格の分布を観察する。そして、対格の機能として A と P を差異化する機能、および、P を明示化する機能が認められることを示す。

4.2.3.1 A と P を差異化する機能

ジンポー語では、Comrie (1981: 178) において提案された以下の有生性階層において、A の有生性が P よりも高い場合、P は絶対格で現れ、一方、P の有生性が A と同等ないしそれよりも高い場合、P は対格で標示される傾向にある。

(23) 人間 > 動物 > 無生物

A/P と人間/動物/無生物との論理的組み合わせは次表のとおりであるが、対格で現れる組み合わせを ✓で、絶対格で現れる組み合わせを – で表すと以下のようになる。

表 4 対格と絶対格の分布

A \ P	人間	動物	無生物
人間	✓	–	–
動物	✓	✓	–
無生物	✓	✓	✓

これらの論理的組み合わせを例示した文を以下に示す (例文に付した > 記号の左は A を右は P を指す)。

(24) ŋay ɕi=phéʔ gəyèt-ʔay. [人間 > 人間]
1SG 3SG=ACC beat-TAM
「私は彼を殴った」(作例)

(25) ŋay gùy gəyèt-ʔay. [人間 > 動物]
1SG dog beat-TAM
「私は犬を殴った」(作例)

(26) ŋay pəloŋ gəyèt-ʔay. [人間 > 無生物]
1SG shirt beat-TAM
「私は服を叩いた」(作例)

(27) ləʔnyaw ŋay=phéʔ gəwá-ʔay. [動物 > 人間]
cat 1SG=ACC bite-TAM
「猫が私を噛んだ」(作例)

(28) ləʔnyaw gùy=phéʔ gəwá-ʔay. [動物 > 動物]
cat dog=ACC bite-TAM
「猫が犬を噛んだ」(作例)

(29) ləʔnyaw pəloŋ gəwá-ʔay. [動物 > 無生物]
cat shirt bite-TAM
「猫が服を噛んだ」(作例)

(30) pəloŋ ɕi=phéʔ kəʔúp-ʔay. [無生物 > 人間]
shirt 3SG=ACC cover-TAM
「服が彼を覆った」(作例)

(31) pəloŋ gùy=phéʔ kəʔúp-ʔay. [無生物 > 動物]
shirt dog=ACC cover-TAM
「服が犬を覆った」(作例)

(32) day pəloŋ nday pəloŋ=phéʔ kəʔúp-ʔay. [無生物 > 無生物]
that shirt this shirt=ACC cover-TAM
「その服がこの服を覆った」(作例)

次に、上記の各例において対格で標示された P から対格を取り除き、反対に、絶対格で現れる P を対格で標示した例を以下に示す。この場合、対格 phéʔ を取り除いた例は全て非文となる。一方、絶対格で現れる P は典型的には絶対格で現れるにしても、これらを対格によって標示しても非文とはならない。このように、上表中 ✓は義務的であるが、– は一般的傾向にすぎないといえる。

(33)*ŋay ɕi gəyèt-ʔay. [人間 > 人間]
1SG 3SG beat-TAM
「私は彼を殴った」

(34) ŋay gùy=phéʔ gəyèt-ʔay. [人間 > 動物]
1SG dog=ACC beat-TAM
「私は犬を殴った」(作例)

(35) ŋay pəloŋ=phéʔ gəyèt-ʔay. [人間 > 無生物]
1SG shirt=ACC beat-TAM
「私は服を叩いた」(作例)

(36)*ləʔnyaw ŋay gəwá-ʔay. [動物 > 人間]
cat 1SG bite-TAM
「猫が私を噛んだ」

(37)*ləʔnyaw gùy gəwá-ʔay. [動物 > 動物]
cat dog bite-TAM
「猫が犬を噛んだ」

(38) ləʔnyaw pəloŋ=phéʔ gəwá-ʔay. [動物 > 無生物]
cat shirt=ACC bite-TAM
「猫が服を噛んだ」(作例)

(39)*pəloŋ ɕi kəʔúp-ʔay. [無生物 > 人間]
shirt 3SG cover-TAM
「服が彼を覆った」

(40)*pəloŋ gùy kəʔúp-ʔay. [無生物 > 動物]
shirt dog cover-TAM
「服が犬を覆った」

(41)*day pəloŋ nday pəloŋ kəʔúp-ʔay. [無生物 > 無生物]
that shirt this shirt cover-TAM
「その服がこの服を覆った」

本小節で見た以上のような対格と絶対格の分布はどのように説明できるだろうか。本稿では、対格 phéʔ は P が A と誤解釈される可能性のある場合に P に付加されると

考える。ジンポー語の基本構成素順序は動詞が節末に現れるという原則が満たされるならば、A と P の順序は基本的に自由である。したがって、A と P がともに絶対格で現れるとどの名詞句が A であり、どの名詞句が P であるか曖昧性が生じることになる。この場合に、A と P を差異化するために P に付加される標識が対格であると考える[10]。ただし、この種の曖昧性が生じるのは P の有生性が A と同等ないし A よりも高い場合であり、P の有生性が A よりも相対的に低く、どの名詞句が A でありどの名詞句が P であるか自明である場合は P を対格で標示する必要はないことになる。本稿では、対格に見られるこの機能を A と P を差異化する機能と呼ぶ。

このように P の標示に有生性が関与することは通言語的に広く観察される現象である。Comrie (1981: 121) は以下のように説明を加えている[11]。

> In the transitive construction, there is an information flow that involves two entities, the A and the P. Although in principle either of A and P can be either animate or definite, it has been noted that in actual discourse there is a strong tendency for the information flow from A to P to correlate with an information flow from more to less animate and from more to less definite. In other words, the most natural kind of transitive construction is one where the A is high in animacy and definiteness, and the P is lower in animacy and definiteness; and any deviation from this pattern leads to a more marked construction.

以上で見てきた例は二項他動詞節の例であった。次に、3 つの項を取る他動詞節の例を観察し、この種の例も同様の原理でとらえられることを見る。3 つの項を取る他動詞節には、三項他動詞節および二項他動詞節から派生された使役構文と適用構文の 3 つが認められる。以下ではこれらの例を順に記述する。

三項他動詞節

(42) のとおり、三項他動詞節において、受益者は典型的に人間であるがために対格で標示され、一方、対象は動物や無生物であるために絶対格で現れるのが基本である[12]。

[10] LaPolla (1992) はチベット・ビルマ語派諸語にこの種の機能を持つ標識が広く認められることを述べ、この標識を ‘anti-ergative’ marking と呼んでいる。

[11] Comrie (1981) はトルコ語のように定性の高い P が対格で標示される例も示しているが、ジンポー語の対格標示に定性が関与することを示す確かな証拠は現時点では得られていない。ジンポー語では「何」や「ある男」などの定性の低い名詞句も対格で標示されうる。

[12] 三項他動詞の受益者 (R) と 対象 (T) のどちらが二項他動詞の被動者 (P) と同様に扱われるかに関して、類型論的には R を P, T から区別して扱うタイプ (T=P R)、T を P, R から区別して扱うタイプ (T P=R)、P, R, T が同様に扱われるタイプ (T=P=R) が知られる。これらはそれぞれ、indirective alignment (direct-object/indirect-object distinction)、secundative alignment (primary-object/secondary-object distinction)、neutral alignment などと呼ばれて

ただし、(43) や (45) のとおり、対象が対格標示を受けても非文にはならない。この場合、三項他動詞節中に 2 つの対格が生起することになる[13]。また、(44) や (45) のように、対象が受益者の前に生起することも可能である。一方、(46) や (47) のとおり、三項他動詞節の受益者名詞句が対格標示を受けない例は非文である。

(42) ɕi ŋay=phéʔ lùŋseŋ+kúmpháʔ jòʔ-ʔay.
3SG 1SG=ACC jade+gift give-TAM
「彼は私に翡翠の贈り物をくれた」

(43) ɕi ŋay=phéʔ lùŋseŋ+kúmpháʔ=phéʔ jòʔ-ʔay.
3SG 1SG=ACC jade+gift=ACC give-TAM
「彼は私に翡翠の贈り物をくれた」(作例)

(44) ɕi lùŋseŋ+kúmpháʔ ŋay=phéʔ jòʔ-ʔay.
3SG jade+gift 1SG=ACC give-TAM
「彼は翡翠の贈り物を私にくれた」(作例)

(45) ɕi lùŋseŋ+kúmpháʔ=phéʔ ŋay=phéʔ jòʔ-ʔay.
3SG jade+gift=ACC 1SG=ACC give-TAM
「彼は翡翠の贈り物を私にくれた」(作例)

(46)*ɕi ŋay lùŋseŋ+kúmpháʔ jòʔ-ʔay.
3SG 1SG jade+gift give-TAM
「彼は私に翡翠の贈り物をくれた」

(47)*ɕi ŋay lùŋseŋ+kúmpháʔ=phéʔ jòʔ-ʔay.
3SG 1SG jade+gift=ACC give-TAM
「彼は私に翡翠の贈り物をくれた」

使役構文

使役構文の被使役者は対格で標示され、対格標示を受けない例は非文となる。

いる (Dryer 1986, Malchukov, Haspelmath and Comrie 2010)。先述のとおり、ジンポー語では P が絶対格と対格で現れる場合があり、また (42) や (43) のとおりに T も絶対格と対格で現れることがあるため、ジンポー語を上記 3 タイプ中に分類することは難しい。

[13] 周知のごとく、日本語では同一節中に 2 つの対格が生起しえない (Shibatani 1977)。これは、ジンポー語と同系言語であるチノ語 (ロロ・ビルマ語支ロロ語群: 中国雲南省) においても同様である (林 2009: 132–3)。

(48) ɕánthe=gò ŋay=phéʔ sa=ɕəŋún-ʔay.
3PL=TOP 1SG=ACC go=CAUS-TAM
「彼らは私を (出張に) 行かせた」

(49)*ɕánthe=gò ŋay sa=ɕəŋún-ʔay.
3PL=TOP 1SG go=CAUS-TAM
「彼らは私を (出張に) 行かせた」

この理由は、使役化の助動詞 ɕəŋún による使役構文が必ず被使役者に有生物を取るためであると考えられる。以下の例に示すとおり、被使役者に無生物を取る使役構文は非文となる。

(50)*ɕi phàʔkhá=phéʔ lum=ɕəŋún-ʔay.
3SG green.tea=ACC be.hot=CAUS-TAM
「彼はお茶に温かくさせた」

以下に示す例は他動詞の使役化を示した例である。この例においても被使役者が対格で標示され、また被動者は絶対格で現れる。

(51) ɕi ŋay=phéʔ gùy gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
3SG 1SG=ACC dog beat=CAUS-TAM
「彼は私に犬を殴らせた」(作例)

(52)*ɕi ŋay gùy gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
3SG 1SG dog beat=CAUS-TAM
「彼は私に犬を殴らせた」

以下の例は被動者に人間を取る他動詞を使役化した例である。この種の例では被使役者と被動者の両方が対格で標示され、対格を伴わない例は非文となる。以下の各例を参照されたい。

(53) màgam=gò ŋay=phéʔ màlàʔ=phéʔ gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
PSN=TOP 1SG=ACC PSN=ACC beat=CAUS-TAM
「マガムは私にマラッを殴らせた」(作例)

(54)*màgam=gò ŋay=phéʔ màlàʔ gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
PSN=TOP 1SG=ACC PSN beat=CAUS-TAM
「マガムは私にマラッを殴らせた」

(55)*màgam=gò ŋay màlàʔ=phéʔ gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
PSN=TOP 1SG PSN=ACC beat=CAUS-TAM
「マガムは私にマラッを殴らせた」

(56)*màgam=gò ŋay màlàʔ gəyèt=ɕəŋún-ʔay.
PSN=TOP 1SG PSN beat=CAUS-TAM
「マガムは私にマラッを殴らせた」

適用構文

適用構文は意味的に周辺的な項 (peripheral argument) を目的語項としてコードする構文である。新しく節に導入される目的語は適用目的語 (applied/applicative object) と呼ばれる。ジンポー語の適用構文には共同適用構文と受益適用構文という 2 種の下位類があり、前者では適用目的語として随伴者名詞句が導入され、後者では適用目的語として受益者名詞句が導入される。このようにして節中に新しく導入された適用目的語は対格で標示される。以下に示す (58) が適用構文の例である[14]。

(57) gənù=gò mà=thèʔ yúp-ʔay.
mother=TOP child=COM sleep-TAM
「母は子供と寝た」(作例)

(58) gənù=gò mà=phéʔ yúp=lóm-ʔay.
mother=TOP child=ACC sleep=APPL-TAM
「母は子供と寝た」(作例)

(59)*gənù=gò mà yúp=lóm-ʔay.
mother=TOP child sleep=APPL-TAM
「母は子供と寝た」

(57) は必須項をひとつ取る自動詞節であり、S としては gənù「母」を取っている。また、この節では随伴者名詞句 mà「子供」も現れており、この名詞句は共格 thèʔ によって標示されている。この名詞句が必須項ではなく周辺項であることはこの名詞句を省略しても文意が損なわれないことから分かる。これに対して、(58) の適用構文では随伴者名詞句が対格によって標示されており、P として節中に導入されている。この節は A gənù「母」と P mà「子供」という二つの必須項を取る他動詞節である。このようにして節に導入された適用目的語は対格で標示されるが、これは適用目的語とし

[14] 若年層話者は適用構文を用いない傾向にある。ここで示す例は 70 代の話者に基づく。

て節中に導入される名詞句が随伴者 (や受益者) であり、これらが人間であるためであると考えられる。

以下に示す例は基底の他動詞節からの適用構文の派生の例である。この例でも適用目的語は対格 phéʔ によって標示される。

(60) ŋay naŋ=thèʔ ʔəráy phay-ʔay.
1SG 2SG=COM thing carry-TAM
「私はあなたと荷物を運んだ」(作例)

(61) ŋay naŋ=phéʔ ʔəráy phay=lóm-ʔay.
1SG 2SG=ACC thing carry=APPL-TAM
「私はあなたと荷物を運んだ」(作例)

(62)*ŋay naŋ ʔəráy phay=lóm-ʔay.
1SG 2SG thing carry=APPL-TAM
「私はあなたと荷物を運んだ」

以上は共同適用構文の例であった。次に受益適用構文の例を挙げておくが、格標示の方法は共同適用構文の場合と同様である。

(63) ŋay naŋ=phéʔ gəbu=ya-ʔay.
1SG 2SG=ACC be.happy=BEN-TAM
「私はあなた (の成功) を喜んだ」(作例)

(64)*ŋay naŋ gəbu=ya-ʔay.
1SG 2SG be.happy=BEN-TAM
「私はあなた (の成功) を喜んだ」

(65) ŋay naŋ=phéʔ ʔəráy phay=ya-ʔay.
1SG 2SG=ACC thing carry=BEN-TAM
「私はあなたのために荷物を運んであげた」(作例)

(66)*ŋay naŋ ʔəráy phay=ya-ʔay.
1SG 2SG thing carry=BEN-TAM
「私はあなたのために荷物を運んであげた」

なお、筆者のデータ中には適用構文に対格が 2 つ生起する例は見られない。この種の例が可能であるかどうかは現時点では明らかでない。

4.2.3.2　P を明示化する機能

4.2.3.1 では対格に A と P を差異化する機能があることを述べた。ここでは対格の機能に上記とは異なる、P を明示化する機能も認めなければならないことを述べる。対格が P の明示化の機能を果たしていると考えられる例を以下で検討する。

P が時間を表す名詞

以下に示すような時間を表す名詞句は動詞の項としての解釈のほかに副詞としての解釈も可能である。このような例では対格を付加した場合と付加しない場合とでは文の意味自体が異なってくる。例えば、次の (67) では gəlóy「いつ」が対格で標示され動詞の項として解釈されているが、この文から対格を取り除いた (68) は gəlóy「いつ」が付加詞と解釈され、(67) とは別の意味を表す文になっている。

(67) yangon=kóʔ wám=na ŋa-ʔay=gò gəlóy=phéʔ ŋú-ʔay=ráy.
Yangon=LOC walk.around=FUT say-NMLZ=TOP when=ACC say-TAM=Q
「ヤンゴンで散歩しようというのはいつのことを言っているのですか」

(68) yangon=kóʔ wám=na ŋa-ʔay=gò gəlóy ŋú-ʔay=ráy.
Yangon=LOC walk.around=FUT say-NMLZ=TOP when say-TAM=Q
「ヤンゴンで散歩しようというのはいつ言いましたか」(作例)

以下のペアでは名詞節が無標示の場合はあいまい文となり、対格が付加された場合のみ一義的な意味になる。これは tèn「時」という名詞が名詞 (関係) 節を伴って副詞節を形成することがあるためである。

(69) gənaw sa=na tèn tsun=dán=na=yô.
younger.brother come=NMLZ time say=show=FUT=SFP
「弟が来るときに/来る時間を言っておきますね」(作例)

(70) gənaw sa=na tèn=phéʔ tsun=dán=na=yô.
younger.brother come=NMLZ time=ACC say=show=FUT=SFP
「弟が来る時間を言っておきますね」

P が名詞節

以下の例に示すとおり、名詞節は典型的に対格で標示される。これは、名詞節標識 -ʔay と TAM 標識 -ʔay が同形であるため、名詞節標識のところで文が終止したのではないことを対格によって明示するためであると考えられる。以下の例では名詞節を [ ] で囲んで示すが、この囲まれた部分だけでも独立の文を成しうる。

(71) [naŋ ń-raw-ʔay]=phéʔ ŋay ce-ʔay.
2SG NEG-be.free-NMLZ=ACC 1SG know-TAM
「あなたが暇ではないことを私は知っている」

(72) [naŋ nday=dèʔ ń-lù sa-ʔay]=phéʔ mìt ń-pyo=ya-ʔay.
2SG here=ALL NEG-be.able come-NMLZ=ACC mind NEG-be.happy=BEN-TAM
「あなたがここに来られないのを悲しく思う」

(73) [naŋ làyka sà=dá-ʔay]=phéʔ lù thí-ʔay.
2SG letter send=RESL-NMLZ=ACC be.able read-TAM
「あなたが手紙を送ったのを読むことができた」

(74) ŋay gəjì-ʔay=ɕəlóy [mún lóʔ-ʔay]=phéʔ ŋay grày khrìt-ʔay.
1SG be.small-TAM=when hair be.many-NMLZ=ACC 1SG very fear-TAM
「私は小さかったころひげが多い人がとても怖かった」

A に先行する P

P が A に先行する場合は P が対格で標示されることが多い。これは P を明示するためであると考えられる。

(75) day lam=phéʔ=gò ŋay ɕənáʔ+məgá=dèʔ nà-ʔay.
that matter=ACC=TOP 1SG night+side=ALL hear-TAM
「そのことは私は夜に聞いた」

(76) day bùm=phéʔ nkawmi=gò nàt+bùm=má ŋa-màʔ-ʔay.
that mountain=ACC some=TOP spirit+mountain=also say-PL-TAM
「その山を何人かは精霊の山とも呼ぶ」

述語動詞から離れた P

P とそれを取る動詞の距離が遠い場合、P を明示するために P が対格で標示される場合が多い。以下の (77) では引用節が、(78) では名詞節が、(79) では副詞節が P とそれを取る動詞の間に現れ、これらを分断している。

(77) dùsàt=phéʔ=gò ʔəgùy ʔəʔnyaw ŋú=ná ɕəgá-ʔay.
animal=ACC=TOP dog cat say=SEQ call-TAM
「動物は (ʔə- を付けて) ʔəgùy「犬」、ʔəʔnyaw「猫」のように呼ぶ」

(78) day=gò jìŋphòʔ+khìŋ=phéʔ gədùn-ʔay=khu cuy=dá-ʔay rê.
that=TOP Jingpho+dress=ACC be.short-NMLZ=PER sew=RESL-NMLZ COP
「それはジンポーの衣装を短く縫ってあるのだ」

(79) sùmla=ni=phéʔ ɕənáʔ yúp-ʔay=ɕəlóy=má yu-ʔay.
picture=PL=ACC night sleep-TAM=when=also see-TAM
「写真を夜、寝るときにも見た」

P が付け足し

以下のような付け足し (afterthought) が P である場合、付け足しが P であることを明示するために P は対格で標示される。

(80) naŋ=gòràʔ-ʔay=ʔi. ŋá=phéʔ.
2SG=TOP like-TAM=SFP fish=ACC
「あなたは好きですか。魚が」

(81) mù-ʔay. náʔ=ná mìʔ+man=phéʔ.
see-TAM 2SG.GEN=GEN eye+face=ACC
「見えた。あなたの顔が」

4.2.3.3 対格の機能: まとめ

以上の観察より、対格 phéʔ が生起する環境にはいくつかの例があることが判明した。これらの考察から、対格の機能には A と P を差異化する機能、および、P を明示化する機能が認められると結論付けることができる。

- A と P の差異化
  - 被動者の差異化
  - 受益者の差異化
  - 被使役者の差異化
  - 適用目的語の差異化
- P の明示化
  - 時間を表す P の明示化
  - 名詞節の P の明示化
  - A に先行する P の明示化
  - 述語動詞から離れた P の明示化
  - 付け足しの P の明示化

5　場所的な意味役割を標示する格

本節では、位置・起点・着点・経路を標示する形式を記述する。

5.1　位格 kóʔ

位格 kóʔ は場所・時間および着点を標示する。

(82) ŋay=kóʔ　jòŋ　　phòʔ-say. [場所]
　1SG=LOC school open-TAM
　「私のところでは学校がもう始まった」

(83) jəphòt=kóʔ　　khiŋ+mətsát=kóʔ ròt=na. [時間]
　morning=LOC hour+eight=LOC　get.up=FUT
　「朝 8 時に起きる」

(84) ńtâ=kóʔ　　dù=tîm　　làyka ka=wà-rìt=yô. [着点]
　house=LOC arrive=but letter write=COME-IMP=SFP
　「家に帰っても手紙を書いてね」

以下の例では位格 kóʔ が所有者を標示してる。これは所有者を所有物の存在場所ととらえるためである。

(85) ŋay=kóʔ　gəgà　məkhón=ni=má grày nóʔ ŋà-ʔay.
　1SG=LOC other song=PL=also　very still be-TAM
　「私のところにはほかの歌もまだたくさんある」

5.2　位格 thàʔ

以下の例に示すとおり、位格 thàʔ も場所・時間および着点を標示する。位格 thàʔ は歴史的には場所名詞 ləthàʔ「上部」に由来する[15]。

[15] 位格 thàʔ では ləthàʔ「上部」の第一音節 lə の脱落が見られるが、ジンポー語では複合などの環境において /ə/ を主母音に持つ弱化音節が脱落する現象が広く認められるため、位格の発展における第一音節脱落はこの言語において珍しい現象というわけではない (e.g., pəloŋ「服」＋lətáʔ「手」＞ lòŋtáʔ「袖」)。

(86) mìt=thàʔ gəra=khu=ráy. [場所]
mind=LOC how=PER=Q
「心の中はどんな感じですか」

(87) məsum+yáʔ jəphòt=thàʔ báy sa=wà=na=yô. [時間]
three+day morning=LOC again come=COME=FUT=SFP
「水曜日の朝にまた来るよ」

(88) gənaw myèn+múŋ=thàʔ báy dù-ʔay=ɕəlóy [着点]
younger.brother Burma+country=LOC again arrive-TAM=when
「あなたがビルマにまた来たとき」

また、以下の例に示すとおり、位格 thàʔ は比較の基準 (standard) を標示することもできる。

(89) ŋay=gò naŋ=thàʔ graw gəbà-ʔay.
1SG=TOP 2SG=LOC more be.big-TAM
「私はあなたよりも年上だ」

(90) ŋay=phéʔ ɕánthe=ná gəɕà=thàʔ graw tsóʔ+ràʔ-ʔay.
1SG=ACC 3PL=GEN child=LOC more love+like-TAM
「私を彼らの子供よりも愛している」

このように、比較の基準の標示に位格を用いる言語は類型論的に珍しいものではない (Stassen 1985: 41–2, 146–57)。なお、先述したとおり、位格 thàʔ は「上部」を意味する名詞 ləthàʔ に由来するが、以下の例に示すとおり、ləthàʔ を用いて比較の基準を標示することはできない。

(91)*ŋay=gò naŋ=ləthàʔ graw gəbà-ʔay.
1SG=TOP 2SG=upon more be.big-TAM
「私はあなたよりも年上だ」

5.3 位格 kóʔ と位格 thàʔ の相違

5.1 および 5.2 で見たとおり、位格 kóʔ と位格 thàʔ は場所・時間・着点を標示する点で共通する。これら 2 つの位格の意味的相違に関してはいまだ明らかではない部分が多い。両形式は置き換え可能であることが多く、例えば、5.2 で示した例文 (86)、(87)、(88) 中の位格 thàʔ を位格 kóʔ に置き換えた以下の文はいずれも文法的である。

(92) mìt=kóʔ gəra=khu=ráy. [場所]
mind=LOC how=PER=Q
「心の中はどんな感じですか」(作例)

(93) məsum+yáʔ jəphòt=kóʔ báy sa=wà=na=yô. [時間]
three+day morning=LOC again come=COME=FUT=SFP
「水曜日の朝にまた来るよ」(作例)

(94) gənaw myèn+múŋ=kóʔ báy dù-ʔay=ɕəlóy [着点]
younger.brother Burma+country=LOC again arrive-TAM=when
「あなたがビルマにまた来たとき」(作例)

以上の例が示すとおり、位格 thàʔ と位格 kóʔ は非常に近い意味を表すと考えられる。ただし、先述したとおり、位格 kóʔ は所有者を標示することが可能であるが、位格 thàʔ にこの用法はない。以下のミニマルペアを参照されたい。

(95) ŋay=kóʔ gəgà məkhón=ni=má grày nóʔ ŋà-ʔay.
1SG=LOC other song=PL=also very still be-TAM
「私のところにはほかの歌もまだたくさんある」

(96)*ŋay=thàʔ gəgà məkhón=ni=má grày nóʔ ŋà-ʔay.
1SG=LOC other song=PL=also very still be-TAM
「私のところにはほかの歌もまだたくさんある」

また、先述したとおり、位格 thàʔ は場所・時間・着点のほかに、比較の基準をも標示するが、位格 kóʔ にはこの用法は見られない。

(97) ŋay=gò naŋ=thàʔ graw gəbà-ʔay.
1SG=TOP 2SG=LOC more be.big-TAM
「私はあなたよりも年上だ」

(98)*ŋay=gò naŋ=kóʔ graw gəbà-ʔay.
1SG=TOP 2SG=LOC more be.big-TAM
「私はあなたよりも年上だ」

以上のように、いくつかの相違が認められはするものの、場所・時間および着点の標示に関しては位格 thàʔ と位格 kóʔ との間の違いは明らかであるとはいえない。

ただし、量的側面からは両者の間に相違が観察される。筆者の編纂した準口語コーパスを検索し、得られたコンコーダンスラインを利用して、位格 thàʔ と位格 kóʔ の出

現頻度を分析したところ、両者の出現頻度に有意義な差が存在することが確認された。具体的には、コーパス中に位格 thàʔ が 456 トークン出現するのに対して、位格 kóʔ は 4,159 トークン出現することが判明した。このように準口語コーパス中では位格 kóʔ の出現頻度が圧倒的に高いといえる。

次に、位格 thàʔ と位格 kóʔ がそれぞれどの意味役割を標示するかを定量的に分析した。位格 kóʔ に関してはトークン数が非常に多いため、得られたコンコーダンスラインの上から 456 例目までを分析した。この分析によって得られた結果を次表に示す[16]。

表 5　位格が標示する意味役割の頻度

標示する意味役割	位格 thàʔ	位格 kóʔ
場所	76	404
時間	288	23
着点	7	29
比較の基準	60	0
その他	25	0
総例数	456	456

この表から、このコーパスに現れる位格 thàʔ は時間を標示する例が最も多いことが分かる。一方、位格 kóʔ は場所を標示する例が最も多いといえる。

なお、母語話者の直観によると、場所を標示する位格 thàʔ は文語的であるという。コーパス中に場所を標示する位格 thàʔ は 76 トークン出現するが、そのうち 36 例は以下に示すような文語的な祈りの文中で用いられていた。

(99) yòŋ gərày+gəsàŋ=thàʔ ʔoŋ+dàŋ=ŋà-ʔùʔgàʔ.
all god+COUP=LOC overcome+overcome=CONT-OPT
「何事も神様のもとで成功しますように」

以上の事実から、位格 thàʔ は典型的に時間・比較の基準を標示し、一方、位格 kóʔ は典型的に場所を標示すると結論付けることができる。

[16] 表中の「その他」は thàʔ を用いたイディオム的表現に見られる thàʔ の例を指す。具体的には、thàʔ lày=ná (LOC pass=SEQ)「～を除いて」、thàʔ khán=ná (LOC follow=SEQ)「～に従って」、thàʔ ńgá (LOC more.than)「～に加えて」の 3 タイプのイディオムが見られた。一方、位格 kóʔ を用いたイディオムは筆者の把握する範囲では確認されていない。

5.4　位格 ʔè

位格 ʔè は場所・時間を標示し、もっぱら文語で用いられる。この形式と位格 kóʔ および位格 thàʔ の相違は文体的なものである。以下の例はニュース記事に出現する例である。

(100) ʔánthe myèn+múŋ=ʔè　　ŋà-ʔay　　ʔəmyú+ɕà=ni　yòŋ
1PL　Burma+country=LOC live-NMLZ race+people=PL all
「我々ビルマに居住する民族は皆」

(101) mòy　ɕòŋ=ʔè　sám+múŋ　jìŋphòʔ=ni　ŋà-ʔay　ɕərà+khán=ʔè
long.ago before=LOC Shan+country Jingpho=PL live-NMLZ place+vicinity=LOC
「昔、シャン州のジンポー人が住んでいた場所で」

5.5　向格

以下の例に示すとおり、向格 dèʔ は着点を標示する[17]。

(102) ɕi=gò　bùm+ləgo=dèʔ　yùʔ-ʔay.
3SG=TOP mountain+leg=ALL descend-TAM
「彼は山の裾へ下りた」

(103) naŋ　myèn+múŋ=dèʔ　sa=wà=na　tèŋ-say=ʔi.
2SG Burma+country=ALL come=COME=NMLZ be.sure-TAM=Q
「あなたがビルマへ来るのは確かですか」

(104) naŋ=phéʔ ń-dù=ga-ʔay=dèʔ　woy sa=na=yô.
2SG=ACC NEG-arrive=EXP-NMLZ=ALL take go=FUT=SFP
「あなたを行ったことがないところへ連れて行くよ」

向格 dèʔ のほかに、着点を標示する形式には 5.1 で記述した位格 kóʔ や 5.2 で記述した位格 thàʔ がある。向格 dèʔ と位格 kóʔ の違いは、着点に直接、有生物を取りうる

[17] カチン州北部域に位置するプータオ市 (Putao) やマチャンボー市 (Machanbaw) で話されるジンポー語ドゥレン方言 (Duleng) では向格は dèʔ ではなく、dàiʔ という形式を用いる。dàiʔ は指示詞 dai「それ」に由来すると考えられ、本稿で扱う方言の向格 dèʔ も指示詞に由来する可能性がある。おそらく向格 dèʔ は *dai > *dàiʔ > dèʔ という発展のプロセスを経たものと推測される。音節末に声門閉鎖音が生じた明確な理由は不明であるが、他の格助詞も声門閉鎖音を持つことが多いため、その類推によって生じた可能性がある。

か否かという点である。以下の例に示すとおり、位格 kóʔ は移動の着点に有生物を取ることができるのに対して、向格 dèʔ は有生物を取ることができない。

(105) dàyní sɔra=kóʔ sa-ʔay.
today teacher=LOC go-TAM
「今日先生のところへ行った」(作例)

(106)*dàyní sɔra=dèʔ sa-ʔay.
today teacher=ALL go-TAM
「今日先生のところへ行った」

向格 dèʔ が有生物を着点として標示する場合は、以下のとおり、有生物名詞と「後」を意味する場所名詞 phaŋ を複合させることによって有生物を場所化する必要がある。

(107) dàyní sɔra+phaŋ=dèʔ sa-ʔay.
today teacher+after=ALL go-TAM
「今日先生のところへ行った」(作例)

以上のとおり、向格 dèʔ および位格 kóʔ は有生物を着点として取ることが可能であるが、位格 thàʔ はいかなる場合であれ、有生物を着点として取ることができない。

(108)*dàyní sɔra=thàʔ sa-ʔay.
today teacher=LOC go-TAM
「今日先生のところへ行った」

(109)*dàyní sɔra+phaŋ=thàʔ sa-ʔay.
today teacher+after=LOC go-TAM
「今日先生のところへ行った」

向格 dèʔ は着点を標示するほかに、以下の例に示すように、場所・時間を標示することもある。この種の dèʔ は phaŋ「後」、mɔgá「側」、ɕìŋgàn「外」のような場所名詞や ɕɔ́naʔ「夜」、jɔphòt「朝」のような時間名詞の後に現れることが多い。

(110) ɕìŋgàn=dèʔ ń-gɔsúp-ʔay.
outside=ALL NEG-play-TAM
「外で遊ばない」

(111) jɔphòt=dèʔ ń-lù-ʔay. dàynáʔ+mɔgá=dèʔ=ɕèʔ lù-ʔay.
morning=ALL NEG-be.able-TAM tonight+side=ALL=only be.able-TAM
「朝はできない。今夜になってようやくできる」

5.6 奪格

起点は継起「～して」を表す接続助詞 ǹná と同形式の ǹná によって標示される。ただし、この形式のみによって起点が標示されることはほとんどなく、通常は位格や向格の後に ǹná を付加して起点が標示される。ǹná は口語ではしばしば ná と発音され、また、位格 kóʔ と ǹná の結合は kôn と縮約して発音されることがある。縮約形 ná は 6.2 で論じる属格 ná と同形になるが、奪格 ná が常に ǹná と交替可能であるのに対し、属格 ná はいかなる場合であれ、ǹná で言い換えることはできない。したがって、このふたつの ná は別の形態素であると考えなければならない。

(112) rúŋ=kóʔ=ná wà=ná məwà+làyka sa ɕərín-ʔay.
office=LOC=ABL return=SEQ Chinese+letter go study-TAM
「事務所から帰って中国語を勉強しに行った」

(113) ɕíʔ=ʔàʔ ǹgùp=thàʔ=ná pru-ʔay céjú+gà=ni=ʔàʔ məjò
3SG.GEN=GEN mouth=LOC=ABL come.out-NMLZ thanks+word=PL=GEN because
「その口から出て来る恵みの言葉に (感嘆して)」(聖書)

(114) phót+náʔ=dèʔ=ná sa=na=ŋú tsun=dàt-ʔay.
tomorrow+night=ALL=ABL go=FUT=QUOT say=release-TAM
「明日の夜から (授業に) 行くと言った」

5.7 到格

到格には dùkhrà がある。この形式は動詞 dù「着く」 に接続助詞 khrà「～まで」を付加した形式に由来する。この表現における動詞 dù「着く」には意味の抽象化が見られ、形態統語的にもすでに動詞としての性質を失っている。例えば、動詞 dù「着く」は向格名詞句を取りうるが到格 dùkhrà が向格名詞句を取ると非文になる。

(115) lətsa=dùkhrà thí-ʔùʔ.
100=LMT count-IMP
「100 まで数えなさい」(作例)

(116)*lətsa=dèʔ dù=khrà thí-ʔùʔ.
100=ALL arrive=till count-IMP
「100 まで数えなさい」

5.8 対格

以下の例に示すとおり、対格 phéʔ は移動の経路を標示することがある。

(117) ɕíʔ nû=gò day khàʔ=phéʔ ráp-ʔay.
3SG.GEN mother=TOP that river=ACC cross-TAM
「彼の母はその川を渡った」

(118) ŋay day bùm=phéʔ məsum+làŋ lùŋ=ga-ʔay.
1SG that mountain=ACC three+time climb=EXP-TAM
「私はその山に三回上ったことがある」

この種の用法が可能であるのは移動動詞の中でも始点と終点の境界性が明確である移動動詞に限られる。以下に示す例は、始点と終点の境界性を持たない移動動詞では移動の経路に対格を付加することができないことを示している。この理由はおそらく、境界性が明確であるほうがより事象を客体化しやすいことによると思われる。

(119) khàʔ=phéʔ ráp-ʔay.
water=ACC cross-TAM
「川を渡った」(作例)

(120) bùm=phéʔ lùŋ-ʔay.
mountain=ACC climb-TAM
「山に登った」(作例)

(121) gá+jərìt=phéʔ lày-ʔay.
land+border=ACC pass-TAM
「国境を越えた」(作例)

(122)*lam=phéʔ khom-ʔay.
road=ACC walk-TAM
「道を歩いた」

(123)*lam=phéʔ gəgàt-ʔay.
road=ACC run-TAM
「道を走った」

(124)*ləmù=phéʔ pyen-ʔay.
sky=ACC fly-TAM
「空を飛んだ」

5.9 通格

以下の例に示すとおり、通格 khu は「～を通って、に従って」という意味を表す。

(125) məlìʔ+khàʔ=gò myèn+múŋdan=ʔàʔ gəʔaŋ=khu lùy+khràt=ŋà-ʔay.
Irrawaddy+river=TOP Burma+country=GEN middle=PER flow+fall=CONT-TAM
「イラワジ川はビルマの中央を通って流れている」

(126) pòy+ləmaŋ=khu gəlo-ʔay.
festival+program=PER do-TAM
「祭りのプログラムに従って行った」

また、この形式は「～のように」や「～語で」という意味を表すこともできる。

(127) gəra=khu dìʔ=na=mà.
how=PER do=FUT=Q
「どうしよう」

(128) day=khu gəlóy ń-tsun-ʔay.
that=PER when NEG-say-TAM
「(ジンポー語では) そのようには決して言わない」

(129) jìŋphòʔ=khu=gò manmo ŋú-ʔay.
Jingpho=PER=TOP Bhamo say-TAM
「(バモーのことを) ジンポー語ではマンモーという」

5.10 絶対格

以下に例示するとおり、移動の着点は向格や位格を伴わず絶対格で現れることもある。なお、絶対格が起点を表すことはありえない。

(130) ŋay=má gənaw=ni=thèʔ nóʔkúʔ+jòŋ sa-ʔay.
1SG=also younger.brother=PL=COM worship+school go-TAM
「私も弟たちと教会へ行った」

また、「今」、「今日」、「昨日」のような時間名詞は必ず絶対格で現れる。

(131) yáʔ bùŋlì gəlo=ŋút-say.
now work do=finish-TAM
「今もう仕事をし終わった」

(132) dàyní gərà=dèʔ ń-sa-ʔay=ʔi.
today where=ALL NEG-go-TAM=Q
「今日はどこにも行きませんでしたか」

6 その他の格標示形式

本節では上述していない格標示形式を取り扱う。具体的には、絶対格・属格・共格を記述し、最後に助詞と名詞の性質を併せ持つ格名詞を取り扱う。

6.1 絶対格

上述した S/A/P、移動の着点、時間名詞のほかに、次のような名詞句も絶対格で現れる。

コピュラ補語

コピュラには否定辞を付加することができるため、本稿の定義ではコピュラの語類は動詞である。コピュラ動詞はコピュラ主語とコピュラ補語の 2 つの項を取る動詞であるが、以下の例に示すとおり、このコピュラ補語は必ず絶対格で現れる。

(133) ɕi=gò mə̀wà+mənaŋ rê.
3SG=TOP Chinese+friend COP
「彼は中国人の友達です」

(134) ŋay=gò mà ń-rê=gò.
1SG=TOP child NEG-COP=SFP
「私は子供ではないよ」

(135) ɕi=gò sərà=má rê.
3SG=TOP teacher=also COP
「彼は先生でもあります」

数量名詞句

次に示すように事象の期間や回数を表す数量名詞句は絶対格で現れる。

(136) rúŋ=gò bàt+mi pàt=dá-ʔay.
office=TOP week+one close=RESL-TAM
「事務所は一週間閉めてある」

(137) ŋay nèt+seŋ məsum+làŋ sa-ʔay.
1SG net+shop three+time come-TAM
「私はネットカフェに三回来た」

呼びかけの対象

呼びかけの対象は必ず絶対格で現れる。

(138) ʔəbâ ŋay=phéʔ jəpan=khu ɕəga=ya-rìt=yô.
elder.brother 1SG=ACC Japan=PER speak=BEN-IMP=SFP
「お兄さん、私に日本語で話してくださいよ」

6.2 属格

所有構造において所有者を標示する格助詞には ʔàʔ と ná の 2 つの形式が認められる[18]。両者の相違点は前者が文語的であるのに対して後者が口語的であるという文体的な違いであり、若年層話者は口語ではもっぱら属格 ná を用いる。一方、物語やニュース記事などの文語体の文では属格 ʔàʔ が基本であり、属格 ná が用いられることはほとんどない。以下に属格の例をそれぞれ挙げる。

(139) mənaŋ=ná mìʔ+sèt khrìŋ ɕáp=ná gəyèt=dá-ʔay.
friend=GEN eye+wear while borrow=SEQ take=RESL-TAM
「友達の眼鏡を少し借りて (この写真を) 撮ってある」

(140) ŋay=ná ʔənû=ná gənaw=ná gəɕà rê.
1SG=GEN mother=GEN younger.brother=GEN child COP
「私の母の弟の子供だ」

[18] Matisoff (1972) はチベット・ビルマ語派諸語においてしばしば名詞節標識・関係節標識・属格標識の 'syncretism' が観察されることを述べ、ジンポー語においても名詞節標識と関係節標識の 'syncretism' が見られ、また、ジンポー語の属格 ʔàʔ も名詞節・関係節標識である ʔay と歴史的な関係を持つであろうと指摘している (p.256)。Matisoff (1972) は属格 ná に関しては触れていないが、ジンポー語には未来・不確定の出来事を名詞節化・関係節化する名詞節・関係節標識に na という形式があり、属格 náもこの標識と歴史的関連を持つのではないかと推測される。

(141) gərày+gəsàŋ=ʔàʔ màw+pha+ʔəmú=ʔàʔ　　məjò
god+COUP=GEN　wonderful+what+work=GEN because
「神の御業のために (我々は恩寵を被ることができる)」(ニュース記事)

(142) mùŋkàn=ʔàʔ ŋùy+pyo　　sìm+sáʔ+lam=phéʔ
world=GEN　be.gentle+be.happy be.quiet+rest+way=ACC
「世界の穏やかな平和を (構築することができる)」(ニュース記事)

このような属格の分布を考慮すると、本来の属格は ʔàʔ であったが、次第に属格 ná が使用範囲を拡大してきているのではないかと思われる。興味深いことに中国のジンポー語方言では属格 ʔàʔ が基本であり、属格 ná は従属部名詞が場所・時間の場合に限られるようである (戴・徐 1992: 262)。一方、インドに分布するジンポー語に系統上近い言語であるシンポー語 (Singpho) では、属格は naa^3 の一種のみである (Morey 2010: 360–2) [19]。このように、西に移るにつれて属格 ná の勢力が拡大していく様子を見て取ることができる。

なお、以下の例に示すとおり、属格 ná は位格や向格の後に付加され、後続する名詞を修飾することがある。一方、属格 ʔàʔ にはこの用法が見られない。この例は、本稿で扱うビルマのジンポー語でも、限定的ではあるが、属格 ná が場所の従属部名詞に限り付加されることを示している。

(143) rúŋ=kóʔ=ná　　mənaŋ=ni=gò　ŋay=phéʔ grày məni=ya-ʔay.
office=LOC=GEN friend=PL=TOP 1SG=ACC very smile=BEN-TAM
「事務所の友だちは私をとても笑った」

(144) thàm+məŋa=thàʔ=ná thàm+mi
time+five=LOC=GEN　time+one
「五分の一」(作例)

(145) ɕánthe=ná məgá=dèʔ=ná　nóʔkúʔ+jòŋ=kóʔ　　ɕàt+ìnán+ɕá+pòy　　sa-ʔay.
3PL=GEN　side=ALL=GEN worship+school=LOC rice+new+eat+festival go-TAM
「彼らの側の教会に収穫感謝祭に行った」

[19] このほかにもシンポー語とジンポー語とでは格助詞の形式が大きく異なる。例えば、シンポー語には動作主を標示する ii^3 という形式が認められるが、本稿で扱うジンポー語にこの形式は観察されない。ほかにもシンポー語の位格には aŋ^2 および goi^3 という形式が見られるが、ジンポー語の位格にこのような形式は認められない。なお、Morey (2010) の表記では ^{1} は low tone、^{2} は high tone、^{3} は mid tone を表す。

6.3　人称代名詞単数属格形

人称代名詞単数には独自の属格形がある[20]。一方、人称代名詞双数および複数は固有の属格形を持たない。人称代名詞のパラダイムを次表に掲げる。

表 6　人称代名詞

	SG		DU	PL
	NOM	GEN		
1st	ŋay	nyéʔ	ʔán	ʔánthe
2nd	naŋ	náʔ	nán	nánthe
3rd	ɕi	ɕíʔ	ɕán	ɕánthe

人称代名詞単数属格形の例を以下に示す。

(146) nyéʔ　　nû=phéʔ=mùŋ　　nóʔ yu=rà-ʔay.
1SG.GEN mother=ACC=also still look=OBLG-TAM
「私の母もまだ世話をしなければならない」

(147) náʔ　　nû=gò　　gəja-ʔay=ʔi.
2SG.GEN mother=TOP be.good-TAM=SFP
「あなたの母は元気ですか」

(148) ɕíʔ　　nû=gò　　ɕi=phéʔ　tsóʔ+ràʔ-ʔay.
3SG.GEN mother=TOP 3SG=ACC love+like-TAM
「彼の母は彼を愛している」

人称代名詞双数および複数は固有の属格形を持たないため、以下に示すとおり、名詞修飾時には属格の格助詞が用いられる。

(149) ɕán=ná　　mənaŋ
3DU=GEN friend
「彼らふたりの友だち」(作例)

[20] これらの形式は全て声門閉鎖音で閉じられており、歴史的には人称代名詞単数主格形と属格 ʔàʔ の縮約から生じた可能性が高い。

(150) ɕánthe=ná ǹsén=phéʔ rìm=ná *radio*=kóʔ ɕəpoi=na rê.
3PL=GEN voice=ACC catch=SEQ radio=LOC scatter=NMLZ COP
「彼らの音声を録音してラジオで流すのだ」

なお、人称代名詞単数属格形にさらに属格の格助詞を付加することも可能である。これらの例と属格の格助詞を用いない例との意味的相違はいまだ明らかではない。今後の課題としたい。

(151) nyéʔ=ná gəphù=mùŋ məri-ʔay=dàʔ.
1SG.GEN=GEN elder.brother=also buy-TAM=HS
「私の兄も買ったそうだ」

(152) náʔ=ná sùmla grày tsòm=ŋà-ʔay.
2SG.GEN=GEN picture very be.beautiful=CONT-TAM
「あなたの写真は美しい」

(153) ɕíʔ=ná gəɕà=ni=mùŋ naŋ=thèʔ ɕəga=məyu-ʔay=dàʔ.
3SG.GEN=GEN child=PL=also 2SG=COM talk=want-TAM=HS
「彼の子供もあなたと話がしたいそうだ」

(154) wâ=ʔè nyéʔ=ʔàʔ sàk+pràt+khrúm+lam=thàʔ=mùŋ
father=SFP 1SG.GEN=GEN life+life+meet+way=LOC=also
「神よ、私の人生においても (導く人になってください)」

(155) náʔ=ʔàʔ ntsa gərày+gəsàŋ ɕəmán=ya-ʔùʔgàʔ.
2SG.GEN=GEN upon god+COUP bless=BEN-OPT
「あなたに神の恵みあれ」

(156) ɕíʔ=ʔàʔ dày+dòʔ+búgá=gò manmo rê.
3SG.GEN=GEN navel+cut+homeland=TOP Bhamo COP
「彼の故郷はバモーである」(ニュース記事)

6.4 共格

thèʔ という形式は、相互行為の相手、随伴者・付帯物、道具・手段、素材、様態、原因、列挙物など多様な意味を表す名詞句を標示する。本稿ではこの形式 thèʔ を共格 (comitative) と呼ぶ。以下では、それぞれの意味を表す名詞句を標示する共格の例を順に記述する。

相互行為の相手

(157) ŋay=gò ʔənû=thèʔ gà lóʔ=khàt-ʔay.
1SG=TOP mother=COM word be.many=RECP-TAM
「私は母と喧嘩した」

(158) gənaw=thèʔ ń-lù khrúm ɕəga-ʔay grày náʔ-say.
younger.brother=COM NEG-be.able meet talk-NMLZ very pass-TAM
「もうずいぶん弟と会って話せていない」

随伴者・付帯物

(159) ŋay=má gənaw=ni=thèʔ nóʔkúʔ+jòŋ sa-ʔay.
1SG=also younger.brother=PL=COM worship+school go-TAM
「私も弟たちと教会へ行った」

以下の例に示すとおり、付帯物は共格を伴って主要部名詞を修飾することがある[21]。

(160) mìʔ+sèt=thèʔ la ləŋây
eye+wear=COM man one
「眼鏡をかけた男がひとり」(作例)

道具・手段

(161) ɕíŋná=thèʔ khán ʔədùp sàt=káw-ʔay.
stick=COM follow beat kill=throw.away-TAM
「ついて行って棒で殴って殺した」

(162) phót+náʔ ǹbuŋ+li=thèʔ yangon dù=na.
tomorrow+night wind+boat=COM Yangon arrive=FUT
「明日の夜、飛行機でヤンゴンに着く」

素材

(163) nday pəlá=ni=phéʔ=gò kəwá=thèʔ gəlo-ʔay.
this arrow=PL=ACC=TOP bomboo=COM make-TAM
「この矢は竹で作られている」

[21] 共格のこの用法は、同系言語であるビルマ語やポー・カレン語 (カレン語群: ビルマ、タイ) にも観察される (岡野 2010: 258, 加藤 2010: 321–2)。

様態

(164) ǹsén gəbà=thèʔ ʔəjàʔwa mərón+jətháw-ʔay.
voice big=COM hard shout+shout-TAM
「大声で強く叫んだ」

(165) mənaŋ=ni lóʔlóʔ=thèʔ lù gəlo-ʔay.
friend=PL many=COM be.able do-TAM
「友達たくさんとすることができた」

原因

(166) nday mərà=thèʔ ɕi=phéʔ thoŋ jəkhràt-ʔay.
this crime=COM 3SG=ACC jail drop-TAM
「この罪で彼を投獄した」

列挙物

(167) ŋay raw=yàŋ làyka=thèʔ sùmla ɕəgún=ya=na=yô.
1SG be.free=if letter=COM picture send=BEN=FUT=SFP
「私が暇なら手紙と写真を送ってあげるね」

(168) ʔənû=thèʔ ʔəwâ=phéʔ gəbu=ɕəŋún=məyu-ʔay.
mother=COM father=ACC be.glad=CAUS=want-TAM
「母と父を喜ばせたい」

継起

以下の例に示すように、共格 thèʔ が名詞節に付加されると継起を表す従属節が形成される。

(169) sùmla mù-ʔay=thèʔ grày gəbu=ná céjú=má dúm-ʔay=yô.
picture see-NMLZ=COM very be.glad=SEQ grace=also feel-TAM=SFP
「写真を見てとても嬉しく感謝もしているよ」

(170) ɕəná̰ʔ jan dù-ʔay=thèʔ gəday=mùŋ ń-khom-say.
night sun arrive-NMLZ=COM who=also NEG-walk-TAM
「夜日が暮れて誰も (外を) 歩かなくなった」

6.5 格名詞

本稿では、mətu「ために」(目的・利益)、məláy「代わりに」、məjò「ために」(原因・理由)、zòn「ように」の 4 つの形式を格名詞と呼ぶ[22]。格名詞は助詞の性質と名詞の性質を併せ持つ形式である。格名詞はそれ自体で文を成さない点で助詞と共通した性質を示すが、属格標示を伴った従属部名詞によって修飾される点では名詞と共通する。この後者の性質を重視し、本稿では格名詞を名詞の下位類に位置づける。

6.5.1 mətu

格名詞 mətu は目的・利益「～のために」の意味を表す (171)。また、この形式は「～にとって」という意味を表す際にも用いられる (172)。

(171) mìʔ=ná mətu=má tsì ɕá-ʔùʔ=yô.
eye=GEN for=also medicine eat-IMP=SFP
「目のためにも薬を飲みなさいよ」

(172) naŋ=gò ŋay=ná mətu=gò gəphù rê=yô.
2SG=TOP 1SG=GEN for=TOP elder.brother COP=SFP
「あなたは私にとっては兄ですよ 」

以下の例に示すとおり、この形式に先行する従属部名詞は必ず属格を伴わなければならない。

(173)*mìʔ mətu=má tsì ɕá-ʔùʔ=yô.
eye for=also medicine eat-IMP=SFP
「目のためにも薬を飲みなさいよ」

(174)*naŋ=gò ŋay mətu=gò gəphù rê=yô.
2SG=TOP 1SG for=TOP elder.brother COP=SFP
「あなたは私にとっては兄ですよ 」

格名詞 mətu は名詞節 (関係節) による修飾を受けることもできる[23]。この性質も格助詞にはない性質である。

[22] 格名詞という用語の初出は澤田 (1999) である。

[23] ジンポー語では名詞節標識と関係節標識は同形式である。本稿では、関係節は名詞節と主名詞の並列 (juxtaposition) であると分析し、関係節には NMLZ というグロスを付している。

(175) làyka sa ɕərín=na　　mətu ləjàŋ=ŋút-say.
letter go study=NMLZ for　prepare=finish-TAM
「行って勉強するためにもう準備ができた」

(176) ɕi=gò　　ŋay=phéʔ khùŋrán=na　mətu tsun-ʔay.
3SG=TOP 1SG=ACC marry=NMLZ for　say-TAM
「彼は私に結婚するように言った」

6.5.2　məláy

格名詞 məláy は「～の代わりに」という意味を表す。(178) に示すとおり、この形式も属格を伴った名詞によって修飾されなければならない。

(177) ŋay=ná　　məláy　pyo=wà-ʔùʔ=yô.
1SG=GEN instead be.happy=COME-IMP=SFP
「私の代わりに楽しんで来てね」

(178)*ŋay　məláy　pyo=wà-ʔùʔ=yô.
1SG instead be.happy=COME-IMP=SFP
「私の代わりに楽しんで来てね」

格名詞 məláy も名詞節 (関係節) による修飾を受けることができる。

(179) ɕìŋgàn　pru=na　　məláy　ńtâ=kóʔ　　ŋà-ʔay.
outside go.out=NMLZ instead house=LOC be-TAM
「外に出る代わりに家にいた」(作例)

6.5.3　məjò

格名詞 məjò は原因・理由「～のために」を表す。(180) の例に示すとおり、この形式を修飾する名詞は属格を伴って現れうる。ただし、前述した 2 つの格名詞とは異なり、(181) の例に示すとおり、従属部名詞が属格を伴わずとも非文にはならない。

(180) khùŋrán+pòy=ná　　məjò　　bùŋlì kín=to-ʔay.
marry+festival=GEN because work be.busy=CONT-TAM
「結婚式のために忙しい」

(181) khùŋrán+pòy　məjò　　bùŋlì kín=to-ʔay.
marry+festival because work be.busy=CONT-TAM
「結婚式のために忙しい」(作例)

格名詞 məjò も名詞節 (関係節) による修飾を受けることができる。

(182) ɕá=yàŋ bo　məcíʔ-ʔay　məjò　　nàw ń-ɕá-ʔay.
eat=if　head ache-NMLZ because too　NEG-eat-TAM
「(揚げ物を) 食べると頭が痛くなるのであまり食べない」

6.5.4　zòn

格名詞 zòn は様子「～のように」を表す。(183) の例に示すとおり、他の格名詞と同様、この形式を修飾する名詞は属格を伴って現れる。ただし、6.5.3 で記述した məjò「～のために」と同様、従属部名詞が属格を伴わずとも非文にはならない。(184) の例に示すとおりである。

(183) ŋay=má　ɕíʔ=ná　　zòn grày bin=məyu-ʔay.
1SG=also 3SG.GEN=GEN like very become=want-TAM
「私も彼のようにとてもなりたい」

(184) day mà=phéʔ　ɕíʔ　　gəɕà zòn baw+məkà=dá-ʔay=dàʔ.
that child=ACC 3SG.GEN child like take.care.of+take.care.of=RESL-TAM=HS
「その子供を彼の子供のように育てておいたそうだ」

他の格名詞同様、格名詞 zòn も名詞節 (関係節) による修飾を受けることができる。

(185) ɕi　gəlo-ʔay　zòn gəlo=na=yô.
3SG do-NMLZ like do=FUT=SFP
「彼がやったようにやりますね」

7　まとめ

本稿ではジンポー語の格を対象にその記述と考察を行った。3 節では格を定義し、ジンポー語の格標示形式の目録および概要を提示した。4 節では S/A/P を標示する形式を記述し、特に対格標識が生起する条件を考察した。その結果、対格の機能には A と P を差異化する機能および P を明示化する機能が認められることが判明した。5 節では場所的な意味役割を表す名詞句を標示する形式に関して述べた。特に位格にいくつかの形式が観察されることを述べ、それらの相違を考察した。その結果、位格 kóʔ と位格 thàʔ には分布が重なりあう部分があるものの、量的側面からは相違が観察され、位格 kóʔ は典型的に場所を標示し、一方、位格 thàʔ は典型的に時間を標示することが判明した。6 節では絶対格・属格・共格を記述し、また、助詞と名詞の性質を併せ持つ格標示形式である格名詞に関して記述した。

記号・略号一覧

-接辞境界; =接語境界; + 語根境界; 1 一人称; 2 二人称; 3 三人称; ABL 奪格; ACC 対格; ALL 向格; APPL 適用; BEN 受益; CAUS 使役; CLF 類別詞; COM 共格; CONT 継続; COP コピュラ; COUP 対語; DEM 指示詞; DU 双数; EXP 経験; FUT 未来; GEN 属格; HORT 勧誘; HS 伝聞; IMP 命令; LMT 到格; LOC 位格; NEG 否定; NMLZ 名詞節標識; NUM 数詞; OBLG 義務; OPT 希求; PER 通格; PL 複数; PROH 禁止; PSN 人名; Q 疑問; QUOT 引用; RECP 相互; REL 関係節; RESL 結果; SEQ 継起; SFP 文末助詞; SG 単数; TOP 主題; TAM テンス・アスペクト・ムード

参考文献

Benedict, Paul K. (1972) *Sino-Tibetan: A Conspectus*. New York: Cambridge University Press.

Bigandet, Paul A. (1858) A comparative vocabulary of Shan, Kakying and Pa-laoung. *Journal of the Indian Archipelago* (New Series) 2: 221–32.

Blake, Barry J. (1994) *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bradley, David. (1996) Kachin. In Stephen A. Wurm, Peter Mühlhäusler, Darrell T. Tryon ed., *Atlas of languages of intercultural communication in the Pacific, Asia, and the Americas* vol. 2.1: 749–51. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bradley, David. (1997) Tibeto-Burman languages and classification. In David Bradley ed., *Tibeto-Burman Languages of the Himalayas, Papers in South East Asian linguistics* 14: 1–72. Pacific Linguistics, Series A, No. 86.

Buchanan, Francis. (1799) On the religion and literature of the Burmas. *Asiatick Researches* 6.1: 163–308.

Burling, Robbins. (1971) The historical place of Jinghpaw in Tibeto-Burman. In Frederic K. Lehman ed., *Occasional papers of the Wolfenden society on Tibeto-Burman linguistics* vol. II: 1–54. Urbana: Department of Linguistics of the University of Illinois.

Burling, Robbins. (1983) The Sal languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7.2: 1–32.

Comrie, Bernard. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*. London: Basil Blackwell.

Crider, Donald M. (1963) The work among Kachins — including Lisus and Nagas. In

Genevieve Soward and Erville Soward ed., *Burma Baptist Chronicle* BOOK II: 367–82. Rangoon: Burma Baptist Convention.

Cushing, Josiah N. (1880) Grammatical sketch of the Kakhyen language. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (New Series) 12: 395–416.

戴慶厦・徐悉艱 (1992)『景頗語語法』北京: 中央民族学院出版社.

戴慶厦 (2001)「景頗語的話題」『語言研究』2001 年第 1 期: 100–5.

Driem, George van. (2001) *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*. Leiden: Brill.

Dryer, Matthew S. (1986) Primary objects, secondary objects, and antidative. *Language* 62: 808–45.

Egerod, Sφren C. (1974) Sino-Tibetan languages. *Encyclopaedia Britannica* 16: 796–806.

Grierson, Geroge A. (ed.) (1903) *Linguistic Survey of India*. vol. III, part II, Bodo-Naga and Kachin groups. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.

Hanson, Olaf. (1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

Hanson, Olaf. (1906) *A Dictionary of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.

林範彦 (2009)『チノ語文法 (悠楽方言) の記述研究』神戸外大研究叢書第 43 冊. 神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

Hertz, Henry F. (1911) *A Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language*. Rangoon: Superintendent Printing Burma.

藤原敬介 (2008)「チャック語の記述言語学的研究」京都大学大学院文学研究科博士論文.

加藤昌彦 (2010)「ポー・カレン語の「格」」澤田編 (2010). 311–30.

倉部慶太 (2011)「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.

倉部慶太 (2012a)「ジンポー語文法概要および民話資料—兄弟が湖を動かした話—」稲垣和也編『地球研言語記述論集』4: 61–100. 京都: 総合地球環境学研究所.

Kurabe, Keita. (2012b) Jinghpaw ga hte Japan ga [Jingpho and Japanese (in Jingpho)]. In Dai Naw Mukwa ed., *Chyurum Shalat*. 117–25. Mandalay: Jinghpaw Wunpawng Laili Laika hte Htunghking Hpung (Mandalay).

Kurabe, Keita. (2012c) On the phonological forms of prefixes in Jingpho. Paper presented at the 18th Himalayan Languages Symposium, Benares Hindu University, Varanasi, India.

Kurabe, Keita. (2012d) On lexical and grammatical borrowing in the Jingpho (Kachin)

Language. Paper presented at the 10th International Burma Studies Conference, Northern Illinois University, DeKalb, IL, USA.

Kurabe, Keita. (2012e) On Duleng Jingpho: a less-described dialect of the Jingpho language. Paper presented at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Nanyang Technological University, Singapore.

LaPolla, Randy J. (1992) 'Anti-ergative' marking in Tibeto-Burman. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 15.1: 1–8.

Lehman, Frederic K. (1993) Kachin. In Paul V. Hockings ed., *Encyclopedia of World Cultures* 5, East and Southeast Asia. 114–9. Boston: G.K. Hall, for HRAF.

劉路編 (1984)『景頗族語言簡志 ・景頗語』北京: 民族出版社.

Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie. (2010) Ditransitive constructions: a typological overview. In Andrej Malchukov, Martin Haspelmath and Bernard Comrie, *Studies in Ditransitive Constructions: A Comparative Handbook*. 1–64. Berlin: Mouton de Gruyter.

Matisoff, James A. (1972) Lahu nominalization, relativization, and genitivization. In John Kimball ed., *Syntax and semantics* I. 237–57. New York: Seminar Press.

Matisoff, James A. (1974) The tones of Jinghpaw and Lolo-Burmese: common origin vs. independent development. *Acta Linguistica Hafniensia* 15.2: 153–212.

Matisoff, James A. (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.

Matisoff, James A. (2012) Re-examining the genetic position of Jingpho: putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. Paper presented at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Nanyang Technological University, Singapore.

Morey, Stephen. (2010) *Turung: A Variety of Singpho Language Spoken in Assam*. Canberra, A.C.T. : Pacific Linguistics, College of Asia and Pacific, Australian National University.

西田龍雄 (1960)「カチン語の研究—バモ方言の記述ならびに比較言語学的考察」『言語研究』38: 1–32.

Nishida, Tatsuo. (1977) Some problems in the comparison of Tibetan, Burmese and Kachin languages. *Studia phonologica* 11: 1–24.

西田龍雄 (1992)「カチン語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』1. 1176–88. 東京: 三省堂.

岡野賢二 (2010)「ビルマ語の格標示」澤田編 (2010). 239–68.

Sangdong, David. (2012) A grammar of the Kadu (Asak) language. Ph.D. dissertation, La Trobe University.

澤田英夫 (1999)「ビルマ語文法 (1 年次・2 年次)」(1998 年版の補訂版) (ms.).

澤田英夫編 (2010)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Shafer, Robert. (1955) Classification of the Sino-Tibetan Languages. *Word* 11: 94–111.

Shafer, Robert. (1966) *Introduction to Sino-Tibetan* Part 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Shibatani, Masayoshi. (1977) Grammatical relations and surface cases. *Language* 53: 789–809.

Stassen, Leon. (1985) *Comparison and Universal Grammar*. Oxford: Blackwell.

Thurgood, Graham. (2003) Sino-Tibetan subgroupings. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla ed., *The Sino-Tibetan Languages*. 3–21. London and New York: Routledge.

藪司郎 (2001)「カチン文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『世界文字辞典』(言語学大辞典別巻). 224–8. 東京: 三省堂.

張麟声 (2004)「景頗語 (Kachin) の主題マーカーについて」益岡隆志編『主題の対照』41–54. 東京: くろしお出版.

中国科学院少数民族語言研究所編 (1959)『景頗語語法綱要』北京: 科学出版社.

[付記]

本稿は平成 24 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、藤原敬介氏から大変有益なご助言を賜った。『京都大学言語学研究』の二人の査読委員の方々からも草稿の段階で多くの有益なご助言を頂いた。末筆ながら、この場を借りて感謝の意を表したい。

Case Marking in Jingpho

Keita KURABE

Abstract

The Jingpho or Kachin language is a Tibeto-Burman language spoken in Kachin State and northern Shan State, Burma and adjacent areas of China and India.

This paper, based on data from a 320-thousand-word corpus of Jingpho which I compiled, provides a description and analysis of the case marking system of Jingpho. An overview and list of case markers are given in section 3. Section 4 discusses case markers for S (intransitive subject), A (transitive subject), and P (transitive object), and claims that the main function of the accusative marker is to distinguish P from A or to mark P explicitly. In section 5, various case markers which mark local semantic roles (locative, source and goal roles) are shown in some detail. Using concordance lines obtained from my corpus, I quantitatively analyse the difference between the two locative markers, *kóʔ* and *thàʔ*, and demonstrate that *kóʔ* typically marks spaces while *thàʔ* typically marks time, although both of them can mark spaces and time. The genitive case and genitive personal pronouns are discussed in section 6, followed by a description of the comitative marker which marks various kinds of semantic roles. Finally, nouns which function as case markers (i.e., *mətu* 'for', *məláy* 'instead', *məjò* 'because', and *zòn* 'like',) are discussed in some detail.

受領日　2012年9月25日
受理日　2012年11月26日